

週刊

夢の窓

No.5



むうにい

自衛隊がふらっと立ち寄る

庭でブーンと唸るような音がする。何事かと思って外に出てみると、頭上から釜飯弁当の釜そっくりな物体がふらふらと舞い降りてくるところだった。

「これって、まさかUFO?!」わたしは仰天した。

釜の蓋がぱっかんと開いて、中から現れたのは自衛隊員だった。どうやら、新しく開発された、1人乗り飛行機らしい。

「大変恐縮なのですが、水を一杯、いただけませんか？」隊員はわたしに向かって敬礼をし、そう頼んだ。

「あ、はい。今、持ってきますね」

わたしは、なみなみと水を注いだコップを隊員に渡す。また、ビシッと敬礼をすると、コップを受け取って、うまそうに飲み干す。

「ありがとうございました」そう言うと、釜飯の釜に駆け戻っていく。

「これからどちらへ？」わたしが尋ねると、

「福島 of 被災地へ、復興支援に行く途中であります。瓦礫の撤去や除染などが、主な任務となっております！」と答えた。

彼は「空中部隊」に属していて、すでに600もの部隊が現地へ向かっているという。それぞれの部隊は100から300名の隊員で編制されているというから、相当な規模である。

「しかも、この飛行ユニット、通称『釜飯』は、陸上においては車輪駆動による移動も可能であり、いかなる場所においても救援活動が可能となっております！」

隊員は誇らしげに説明をすると、また敬礼をした。

「釜飯」の蓋が閉じ、降りてきた時と同様、ブーンと音を発しながら、再び空中へと浮かび上がる。わたしは見上げて手を振り、たぶん、もう聞こえていないだろうけれど、ねぎらいの言葉をかけた。「大変な作業でしょうが、頑張ってくださいーい！ 福島の人たちが、1日でも早く、不自由な生活から戻れるよう、よろしくです！」

50メートルばかり、漂うように上昇していったが、そこからは一気に加速をして、たちまち雲間へと消えた。ほどなくして、はるか高く、青空をバックに、白く鋭いコントレイルを残していった。

わたしはそのことを話したくてたまらなくなり、友人の桑田に電話を掛ける。

「空を見てみなよ。ほら、飛行機雲が見えるだろ？ あれはね、被災地を支援しに行く、自衛隊の新型飛行機なんだ」

電話の向こうで、窓をガラガラッと開ける音が聞こえた。

「あれのことか。どう見てもただの飛行機雲だな。あの辺りの空には、いつも旅客機が行き来してるぜ」

「違ってる、今さっき、うちの庭から飛びたった自衛隊機なんだって」

わたしがどう説明しても、桑田には信じられないらしかった。

「ふうん……。『釜飯』って言ったっけ？ 悪いけど、聞いたこともないな、そんなー」桑田の言葉が、心と途切れた。

「どうしたの？」わたしは呼びかける。

「なあ、おれは夢でも見てるのかな」まるで独り言のように桑田がつぶやいた。「夢じゃないとしたら、おまえの話を信じるしかないらしいぞ」

わたしは空を仰いだ。

さっきまであった雲が一片残らず消えている。代わりに、無数の飛行機雲が、空一面、縞模様を描き出していた。数百、いや数千本はある。

「東北の復興はすぐだね……」

わたしは思わず声を漏らした。けれど、胸が詰まって、おしまいの方は言葉にならなかった。

サンシャイン60の増築

休日、サンシャイン・シティの屋外ガーデンで日向ぼっこをしていると、恰幅のいい初老の男に声を掛けられた。

「わたしはこのサンシャイン・シティの統括管理者ですが、見たところ、あなたはいかにも暇そうですな。そこで、どうだろう。1つ、仕事を頼まれてはもらえないだろうか？」

男の胸には金色のバッジが光っている。どうやら、本物の統括管理者に間違いないようだ。

「どんな仕事ですか？」わたしは尋ねた。

「なあに、簡単なことだよ。ほれ、サンシャイン60がそびえているね？ あのとてっぺんに、東京タワーを移設してもらいたいんだ」

「えー、無理ですよ。無理無理っ。建築のことなど、何にも知りませんし」わたしは即座に断った。けれど男は引き下がらない。

「いや、何も難しいことをしろと言っているんじゃないんだ。屋上にだね、ぽんっと東京タワーを一ー」

相手が最後まで言い終わるまえに、わたしは言ってやった。

「それが難しいことだと言ってるんですよ。無茶な人ですね、あなたは」

「そこをなんとか」

「なんとも、なりませんっ」

「本当に？」

「本当に、です」

「本当に本当？」

「しつこいなあっ！」

男は、近くのベンチにどすん、と座り込んだ。気の毒なほど落胆した様子である。

「あの……」見かねて、つい問い掛けてしまった。「一体、どうしてそんなことをしなくちゃならないんですか」

男はぱっと顔を上げ、よくぞ聞いてくれた、と言いたげに目を輝かせた。

「スカイツリーって聞いたことあるかね？」そりゃあ、有名ですから。「あれに対抗するには、サンシャイン60の上に、東京タワーをどうしても乗っけなくちゃあならんのだよ」

「はあ。でも、それじゃ足りないと思いますよ。スカイツリーって630メートル以上ですよ？ サンシャインと東京タワーを合わせても、まだ届きませんよ」

「なに、サンシャイン・シティの地下を底上げするさ。へっちゃら、へっちゃら」

「えー、底上げって……。60メートルもですかっ？」驚くというより、呆れ果てた。

「そんなわけで、君。どうか、手を貸してくれたまえ」統括管理者と名乗るその男は、にこやかに握手を求めてきた。交渉が成立したものと、すっかり勘違いをしている。

わたしはその手を軽くはたいて退け、きっぱりと言う。

「今度こそ、絶対にお断りします！」

大きな本

ピンポンとチャイムが鳴った。

「こんにちはーっ、毎度お馴染みの宅配便ですよーっ」

えっと、何かポチったっけ？ とりあえず、引き出しからシャチハタを探し出すと、戸口へ急いだ。

「はいはいっ、今行きます」

ドアを開けると、やたらと大きな荷物が目に飛び込んできた。

「なんですか、これ？」わたしは思わず聞いてしまった。

「さあ、何でしょうねえ。うちはただ、お届けに上がったただけですから」

ごもつとも。

受け取り証にハンコを押すと、配達員に手伝ってもらいながら、荷物を中へ運び入れる。

包みを解くと、ふすまほどもある大きな絵本が現れた。

「まるで巨人の本だよ……」なんだか、自分が小人にでもなったような気がしてくる。

タイトルは「いもほり名人、南の都に行く」とあった。表紙には、どこことなく間の抜けた人物が、芋を入れる籠を背負って、黄色いレンガの道をのんきに歩いていく姿が描かれている。

ページをめくってみる。これはなかなか大変な作業だった。何しろ、ふすまなのだ。

やっとの事でめくり終えて、「あっ」と声を上げた。ページに沿って、四角く空間が切り抜かれている。その向こうには、表紙に描かれていた世界が広がっていた。

花咲乱れる野原を、どこまでも伸びる黄色いレンガの道。そのずっとはるか遠くには、ピンク色をした城がかすかに見える。あれが南の都なのだろう。

「絵本の舞台、というわけか」わたしは少し逡巡したが、えい、ままよ、と足を踏み入れた。

たちまち、むせ返るほどの花の香りに包まれる。素足に、ひんやりとしたレンガの感触が伝わってきた。そうだった、靴を履いてこなくては。

いったん部屋に戻ると、玄関からスニーカーを取ってくる。

再び絵本の国へと飛び込むと、道に沿って歩き始めた。

「あのピンクの城まで、どうか無事に着きますように」心配性のわたしは、早くも先行きを案じていた。物語の進行上、トラブルが続々と襲いかかってくることは想像に難くない。それまでに仲間がちゃんとそろっているといいのだが。うっかり出会いそびれて、何もかも独りで対処するハメになったら最悪だ。

そもそも、この旅の目的は何だろう？

絵本のタイトルを思い出してみる。「いもほり名人、南の都へ行く」。

きっと、芋掘りの名人が、南の都で活躍する話なのだろう。案外、芋を掘っただけで終わりかもしれない。近頃の本ときたら、オチも何もあったものじゃないのだ。

あれ？ 待てよ。この絵本の主人公は「いもほり名人」だが、わたしの目を通して物語が紡がれて

いる。

ということは、わたしが芋掘り名人ということになる。

ぽっと表紙のイラストが蘇った。間抜けそうな芋掘り名人が、ぴよこたん、ぴよこたん歩いている、そんな絵だ。

どこかで見た顔だとは思っていたが、なるほど、それもそのはずである。

スーパーバイザーに会いに行く

友人の桑田孝夫とわたしとで、互いを心理分析してみよう、ということになった。「その前に、スーパーバイザーから指導を受けなくちゃね」わたしは言った。「青森におれの知り合いの心理臨床家がいるぞ。その人に頼むとしようか」そんなわけで、わたしたちは青森へ向かった。

レンタカー・ショップで、店員お勧めの最新車種を借りる。三菱のハイブリッド車で、ギャランドゥExcelという名前だった。

「なんだか昭和臭えネーミングだな。ほんとに三菱なのか？」桑田が疑わしそうな顔をする。

正直、わたしもダサい名前だとは感じていた。ただ、ルックスはなかなかだ。プリウスとコルトを足して2で割ったよう、と言えば、だいたいの雰囲気がつかめるのではないだろうか。

休憩ごとに、交代で運転をしようと話し合っただけで決めた。最初はわたしだった。

ところが、いざ運転席に座ってみると、このギャランドゥ、なんとマニュアル車だった。わたしの免許はAT限定なのである。

「ごめん、桑田。こいつマニュアルだった。悪いけど、行きも帰りも、ずっと運転を頼むねっ」

「まったく、しょうがねえなあ。それにしても、今どきマニュアル車って……」

高速道路をひたすら走って、思ったよりも早く目的地に到着した。

「ICを降りてすぐのところだ」桑田はテキパキとギアを変えながら言った。「えーと……ほら、あの林の近く。見えるだろ、水色の城みたいな建物」

地方でよく見かける、ラブ・ホテルのようなあれがそうか。

「ユング派だって、言ってたっけ？ なるほどねー、フロイトじゃ、あんな診療所は建てないだろうね」わたしは思ったことを、ありのまま口にした。

「だな」桑田も同調する。

「水色の城」は、近くで見ると、いっそう奇抜だった。入り口付近にはパルテノンのような石柱が並んでいたが、表面に施してある彫刻は、デフォルメされた可愛らしい動物たちなのだ。キリンもいれば、ライオンもいる。亀や魚、鳥や昆虫、本来の棲み分けなど一切関係なく、無秩序に並んでいた。「本当は心療内科なんかじゃなく、幼稚園だと言われても、きっと信じてしまいそう」とわたし。

桑田は戸口の呼び鈴を押した。

「はい、どちら様でしょうか？」神経質そうな男の声が対応する。

「あの、東京の桑田ですが、スーパーバイザーをお願いしたいのですが」

「桑田？ 東京の？」インターフォンの向こうで首をかしげている様子が見てとれた。「うーん、悪いが思い出せないよ。また今度、来てくれないかな」

えー、遠路はるばる青森までやって来たのに。

「桑田、ちゃんとアポ取ったの？」わたしはいくぶん強い口調で聞いた。

「いや、そんなのは。変だなあ、おれが子供の頃は、よくお互いに行き来をする間柄だったんだけどな」桑田も、すっかり困りきっている。

「仕方がない、帰るとしようよ。ドライブに来たと思えばいいじゃん」

「そう言ってもらえると、気が楽になる。そうだな、帰るか」

わたしたちはクルマに戻った。

走り出してしばらくすると、カックン、カックンと揺れ出した。初め、桑田がふざけて運転しているのかと思い、

「ねえ、やめてよ。乗り物酔いするじゃん」と文句をぶつけた。

「違うんだ、どうもエンジンの調子が悪いらしい」

その言葉を証明するかのようには、間もなくしてクルマは止まってしまい、それっきりうんともすんとも言わなくなった。

「どうしよう……」わたしは途方に暮れた。

「最新のクルマが聞いて呆れる。ギャランドゥだっけ？　そもそも、お前がこんなわけのわからんクルマなんて借りてくるからだぞっ」桑田もかなり、カリカリしている。

トランクを調べてみると、2人乗り専用の自転車があった。

わたしと桑田は顔を見合わせる。

「これに乗るしかなさそうだね」

「ああ、仕方ねえな」

わたしが前に乗り、桑田は後ろにまたがった。

「行くよ」わたしはペダルに足を掛ける。

「いいぞっ」

自転車はゆっくりと進み始めた。

もう、日が暮れるなあ。今夜は野宿か。

言い知れぬ敗北感が全身を包む。どうやら桑田も同じらしく、背後からはため息ばかりが聞こえてくる。

悪の秘密結社のアジト

まさか新宿駅の地下街に、秘密の入り口があるとは思わなかった。

西口の高速バスターミナル方面へ行き、地上へと出る階段のすぐ脇に小さなドアがある。一見すると、たんなる鉄の板だ。取っ手も鍵穴も見当たらない。

わたしは、あらかじめ教えられていたシークレット・コードを叩き込んだ。こぶしで、「コンココン、ココココンコン、コンココン」と。

鉄の板はギイッと音を立てて、内側へ倒れた。狭く真っ暗な通路が現れる。

辺りを見回して誰もいないことを確かめると、素早く体を滑り込ませた。はるか奥に、非常灯の緑色の光が見える。そのわずかな明かりのおかげで、周囲の壁がかるうじて確認できる。

「こちら、むうにい。潜入に成功した」腕時計型の通信機に口を近づけ、声をひそめて報告した。「これより、敵の司令室へ向かう。通信を傍受される危険があるので、無線を切る……」

ここは、世界征服を企む、悪の秘密結社のアジトだった。わたし達エージェントの決死の調査によって、ようやく場所を突き止めたのだ。

司令室でふんぞり返って、あれやこれやと悪巧みを指示している「将軍」め、今度こそ終わりだ！

すでに先鋒隊が数人、送り込まれているはずだった。あいにく、わたしは彼らの顔を知らない。なぜなら、作戦会議のあったその日、通勤電車を乗り間違えて大遅刻してしまったからだ。

狭い通路を抜けると廊下に出た。秘密基地めいた場所を想像していたので、いくらか拍子抜けしてしまう。普通のオフィスだ、と言われても信じてしまいそう。

けっこうな人数が行き来をしていた。ほとんどが男だったが、白衣を着た女性もちらほらと見る。

「さてと、仲間はどこかな」向こうもこちらを知らないのだから、探すのに骨が折れそうだ。

通りかかった男に声を掛けてみる。

「あの、ちょっとお尋ねしますが」

「はい、なんでしょう」

わたしは身分証を見せ、

「こういうカードを持っている人を見かけませんでした？」と聞いた。

相手は首をかしげて、「さあ……見てませんねえ」

「そうですか、どうもありがとうございます」

この身分証を知らないということは、わたしの仲間ではないということになる。我ながらいいアイデアだ。

司令室を探して歩きながら、わたしは誰彼かまわず、カードを見せて尋ねた。

その甲斐あって、やっと3人ばかり仲間と出会うことができた。

もっと見つけようと思い、向こうからやって来た、ずんぐりとした若い男を呼びとめる。

「すいません、このカードを知りませんか」

男はカードをまじまじと見つめ、

「もちろん、知ってるさ。我がアジトにようこそ！」

あれっ、どうりで見た顔だと思ったら、「将軍」様だ。これは、まずい。

わたしはきびすを返すと、全速力で駆け出した。

「おい、待てっ！ 逃げられると思うかーっ！」背後から「将軍」が叫ぶ。

あちこちから、ピエロの格好をした連中が湧いて出る。戦闘員だ。間抜けな姿をしているくせに、機敏な動きで追ってくる。実に気味の悪い連中だ。

「こっちだっ」半開きのドアの陰から、誰かに呼び止められる。さっき出会ったばかりの仲間だった。ドアの隙間から、転がり込む。

「ありがとう、助かった」わたしは礼を言った。「ごめん、ドジを踏んじゃった……」

「何、かまわないさ。奴ら、永田町に向けてミサイルをぶっ放す予定なんだが、こいつは不発に終わるだろうよ」そう言って意味ありげにニヤッと笑った。

「どういうこと？」

「火薬の代わりに、トウモロコシを詰めてやったんだ」

ネコとプランクトン

荒川土手を散歩していると、川端で三毛ネコがしゃがみ込んでいた。

何をしているんだろうと思い、そっと近づいてみると、水に顔を近づけて、しきりにニャアニャアと鳴いている。まるで、おしゃべりでもしているようだ。

「何してるの？」わたしはネコの隣にかがんで聞いてみた。

ネコは振り返ると、「ニャニャアッ！」と答える。言葉こそわからなかったけれど、なぜだか意味がわかった。

彼女はプランクトン的一种である、ワムシと話をしているのだ。

川の中をよくよく見ると、確かに小さな生き物の姿があった。体がほとんど透けているので、いっそう見づらかったが。

ネコが「ニャア～ニャンニャ」と言うと、ワムシは体をひねったり、くるくると回ってみせる。声を持たないこの微生物は、ボディ・ランゲージで意志を伝えているのだ。

「君たちは仲がいいんだね」わたしは感心して言った。

ネコは「ニャンッ」とうなずき、ワムシも前のめりに回転して同意する。

ポケットにクッキーが余っていたことを思い出し、2匹に分けてやる。ネコはほとんど一口でペロッと食べてしまったけれど、小さなワムシには、砂粒ほどに砕いたかけらでさえ、手に余るようだった。「もっと細かくしてから投げてやればよかったね」とネコに声を掛けると、そう思う、というように「ニャッ」と鳴いた。

ネコとワムシは、お互い、その日にあった出来事を話しているらしかった。

このネコは基本的に野良だったが、毎日必ず立ち寄る家があるという。ご飯をもらったり、あごの下をなでてもらう。今朝は、市販のカリカリに、ツナ缶も付いてきた。その後、空き地へ行き、他のネコ達にそのことを報告したら、たいそう、うらやましがられた、とワムシに語る。

一方のワムシは、川底まで沈んだり水面近くまで浮かび上がったたりするのが、何より愉快なのだと、水を揺らしながら言う。知り合いのミジンコは泳ぎが得意で、「向こう岸まで旅をしてくる」と言い置いて、ついさっき出発したそうだ。次に会えるのは、たぶん4、5日先になると思う……。

これらの会話を、わたしは決して耳で聞いたわけではない。ネコ語はちんぷんかんぷんだし、ワムシのジェスチャーにしたって、よほど目を凝らさなければわからない。

それでも彼らの話が伝わるのは、おそらく2匹の間に結ばれた絆によるものだろう。本当に大切なことは、言葉などではなく、心の波動で響き合うものだ。

三毛ネコとワムシ。種こそ違えど、友情は固く、信頼は厚い。人間同士でさえ、これほどの間柄をわたしは見たことがなかった。

「さてと、そろそろ帰ろうかなっ」わたしは立ち上がった。

「ニャアー」ネコは鳴き、しっぽをぱふんっと軽く振る。

みなもに、小さな小さな波紋が広がった。あんまりかすかだったので、もう少しで見落とすところだった。ワムシが飛び跳ねたのだ。

「うん、さようなら。またねっ」わたしもあいさつを返す。

土手を登って、2匹を振り返る。まだ、おしゃべりを続けている。

いいなあ、あんな関係。

わたしはうらやましくてしかたがなかった。

オフラインでロールプレイングをする

ポストをのぞくと、ちらしが入っていた。オフラインでロール・プレイング・ゲームを開催する、とある。

ゲーム好きの後輩、中込を誘って参加することにした。

場所は近郊の森林公園。朝9時に待ち合わせる。

「中込君のその格好はいったい……」わたしはまじまじと見つめた。

上下を迷彩服で包み、ヘルメットにゴーグル、手にはスプリングフィールドM14を構えている。

「はあ、おかしいでしょうか？」自分では自然だと思っているらしい。

「そのまま電車に乗ってきたの？」

「ええ、まあ。ホームで多少の撃ち合いはありましたが、ちゃんと仕留めてきましたよ。向こうなんて、間違えて一般人を撃っちゃって、さんざん怒られてましたけど」

「ふーん、そう……」つつこむのも面倒になった。

会場の入り口で受け付けを済ませ、マップとテキストをもらう。シナリオを順にクリアしないと、次へは進めない、と書かれている。

「森林公園って、ばかっ広いんですねー」中込はマップと周りの景色とを見比べながら感心している。

「1周するだけで2時間は掛かるっていうしね」

「うひゃあーっ！」

「じゃ、行こうか。最初のイベントは『羽虫』だっさ」

テキストによれば、森林公園のいたるところに飛び回っている「羽虫」を片っ端から捕まえて、備品のビニール袋に詰めていく。決められた時間内で、どれだけ集められるかを競う。

「地味なイベントっすね」と中込。自分の頭の周りを飛び回る羽虫を、汗だくになって追っている。

「まったくね。あっ、また逃げられた！ すばしっこい奴めっ」あっちこっちと腕を振り回すのだが、広いた手の中はいつも空っぽだった。

「むうにい先輩、まるで盆踊りでも踊ってるみたいですよ」中込が大笑いをする。

盆踊りの方がよほど楽しかったろう、と心から思った。

時間切れを報せるサイレンが鳴ったので、わたしたちは受け付けまで戻った。

「ぼくはやっと50匹くらいっすよ」中込はビニール袋を振りながら、つまらなそうな声を出す。

わたしのはさらに少なく、何度数えても21匹しかいなかった。

「次のイベントでがんばろうねえ」

森のあちこちから、他のグループも帰ってきた。みんな、手にはビニール袋を持っている。中には、パンパンに膨れて真っ黒になっている者もあった。あの中身は、すべて羽虫なのだ。

次は「どんぐり拾い」だった。とにかく、たくさん拾い集めた者が勝者となる。

「さっきより、もっと地味っすねー」だるそうに中込が言う。

「やれやれ、どんぐりなんか拾ったって、何の得にもならないのに」わたしもだんだん億劫になってきた。「これがせめて、栗とかだったらなあ」

「あ、知ってました？ 先輩。天津甘栗って、天津で採れる栗じゃないんすよ。そんな栗、ほんとはないんです」

なんだか、どっと疲れてしまった。

週刊 夢の窓 No.5

<http://p.booklog.jp/book/86132>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86132>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86132>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ